
being

汁婆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

being

【Nコード】

N8478S

【作者名】

汁婆

【あらすじ】

親の残した借金により悪徳高利貸に追われる青年はとうとう追い詰められ、二択を迫られる。

それによりエデンという仮想世界に人体実験として参加することになる。

そこから出る条件は仮想世界内で10億稼ぐ必要がある。

プレイヤーは金に困る等で死ぬしか選択肢のない者、死刑囚、そして酔狂な志願者。

また、プレイヤーを殺せば所持金、装備、殺害したプレイヤーの能

力値の5%がプラスされる。しかし、仮想世界内で死んだプレイヤーは現実世界においても死を迎えることになる。
そんな世界で過ごすことになった青年の物語

佐藤太郎

ドンドンと扉を叩く音がする。

それはノックと言うには大きな音で、文字通り扉を叩く音だ。

それが木造築三十年を越えるアパートの一階の一室の前から響く。

扉の前には扉を叩き続ける身長180センチもある巨漢の男と、それとは対照的に150センチそこそこしかない小太りの人相の悪い男達が立っている。

「佐藤さん、居ませんか」

巨漢の男が猫なで声を発しながら、扉の中へと問い掛ける。
しかし返ってくるのは静寂だけで、それに応える声はない。

「佐藤さん、お留守ですか」

今一度、男が問い掛ける。

だがやはり応える声はない。

巨漢の男はその反応に誰も居ないと諦めたのか扉を叩いていた腕を下ろす。

そしてその場でひとつ深呼吸をすると、突然扉を強く蹴る。

「中に居るのはわかってんだよっ！ 出てこいっ！」

先ほどまでの口調とは打って変わったドスの効いた声で扉に向かって怒鳴る。

あまりの大声に大気が震えたかのような錯覚を起こすほどだ。

「てめー、黙ってやり過ぎや逃げられるとも思ってたのかっ！」

怒声と共に更に扉を強く蹴る。

その音を不快に思ったのか、隣の部屋の扉が開き、中から少しだけ老婆が顔を覗かせる。

「何見てんだよババアっ！」

「ひいつ」

巨漢の男が威圧するように老婆を睨みつけると老婆はそれに驚いたのか、すぐに扉を閉めて中へと隠れてしまう。

「こらこら、お年寄りを虐めてどうする」

「でもよ」

「私達が虐めるべき相手はこの扉の中でしょ？ 関係ない人に迷惑をかけたらダメダメ」

小柄な男が巨漢の男の行動を窺める。

今、自分達がやっていることは人の迷惑になっていることなど微塵も感じていないような口ぶりだ。

しかし、それをツッコむ様な野暮な者、いや、この場においては勇気ある者はいない。

「それにしても、こうまでして反応がないとなると本当に留守なんだろうね。んじゃ今日は撤収しますか」

「で、でも兄貴……」

小柄な男の言葉に反論しようとした巨漢の男はそこで言葉を止める。なぜなら、兄貴と呼んだ小柄な男が不適な笑みを浮かべながら人差し指を鼻の前に掲げて静にしろと合図をしているからだ。

「わ、わかった……」

巨漢の男はそれに頷くと、踵を返して歩きはじめた小柄な男の後を付いていく。

数分してから先ほどもで男達が立っていた扉のドアノブが静に回る。そして、慎重にと言うか慎重過ぎるほどにゆっくりと扉が開く。そこから顔を覗かせたのはまだ、二十歳前後でしかない青年だ。身長172センチ、痩せ型で顔立ちは大して特徴のない無味無臭であるが、生まれてこの方一度も染めたことのないというのに髪は淡い茶色と言うのが特徴と言えば特徴である。その髪は邪魔にならないように短く刈っている。

青年は辺りを確認すると音を立てないように扉の外に出る。

「ふう…… やつと行っ たか…… 本当に毎度毎度しつこい」

苦々しげに呟くも聞いている者は誰も居ない。

「やべ…… 早くしないとバイトに遅れる」

左手の腕時計を確認して焦ったように言葉を呟く。彼の頭に人の良さそうな顔をしながらねちねちと嫌味やら愚痴を吐きまくるバイト先の店長が不機嫌な顔をしながら時計とにらめっこをしている姿が浮かぶ。

青年は急ぎながらかつ音を立てないように注意しながら扉を閉めて施錠する。

「どこに遅れるんでちゅかー？」

その時、青年の背後で甘えたような赤ちゃん言葉でありながら、有無を言わせないような迫力のある男の声が聞こえる。

青年がゆっくりと振り向けばそこには先ほど帰ったはずの巨漢と小柄な男の二人組がそこにいた。

「さ、相良さん……どうもです」

「どうもあー、佐藤くんさあーさっき私らがドアをノックしても出てくんなかったじゃん。どうしちゃったの？　もしかして寝てた？」

「あ、そ、そうなんです。大分深く寝てたみたいで来てたことに気づかなくて……すいません」

相良と呼んだ小柄な男の優しい言葉でありながら威圧感に溢れた声音に青年、佐藤太郎はただその言葉を肯定し、謝罪することしかできない。

「ふーん、そっかー……まあ、連日バイト三昧みたいだもんね」

「は、はい……」

「ところでさあ……金は用意できたんか？」

それまでの口調とは変わった人を脅すためのみの言葉に佐藤の体にゾクツと悪寒の様なものが走る。

「い、いえ……まだです……」

「困るんだよね、返済期限は当の昔に過ぎたこと知ってるでしょ？」

「あと一月、あと一月だけ待ってください。もうすぐバイト代が入るんです。そうしたら……」

「んのはした金、利息分にもなりやしねーよっ！」

土下座しようとした佐藤の顔が巨漢の男の怒声と共に蹴り上げられる。

硬い地面に佐藤の体が横たわる。

「こら、大熊くん。手を挙げるのは御法度ですよ。全く困ったものだよ……佐藤くん、眠いのはわかるけど部屋の外で、ましてや人との会話中つてのは失礼に当たるから気をつけてよね」

言外に君が勝手に横たわっただけで、こちらは手を出してないと相良は告げる。

佐藤はそれに痛むあごを手で押さえながら頷いた。

「まあ、大熊くんの言ったことももっともだ。バイト代ってせいぜい数万くらいでしょ？ まったく足りないよ。なにせ君の負債は二億なんだから」

相良の言葉に佐藤の顔が歪む。

その表情はただ単に悔しだけが浮かんでいた。

「なんで俺が、って顔してるね。恨むなら私達じゃなくて、君の両親を恨みなよ。二億もの借金を息子の君に押し付けて姿をくらませた両親に」

その言葉に佐藤の顔が悔しだけでなく、まさに憎悪とも言えるものがプラスされる。

佐藤の両親は小さな工場を経営していた。

車の部品を主に扱っている工場で、裕福とは言えなくもそれなりの生活を送っていたのだが、佐藤の親は父の親友であった男の投資の話に乗り、まんまと騙されてしまった。

そこで負った借金が四億。

そして、工場や家財道具一式などを売り払い金を作り、半分の二億

は返済したのだがそこから先はどうすることもできなかった。
借金取りに追われる日々疲れきった両親はそのまま何処かへ消えた。

あとに残ったのは借金だけで、借金取りは逃げた両親を探すという無駄な労力を注ぎ込むより居場所のはっきりしていた息子である太郎にそのまま返済を迫った。

これが佐藤に男達が付きまとう理由。

今、両親に対して佐藤が持っている感情は憎悪しかない。

最初は何か理由があつて消えたとも思っていた時期もあったのだが、借金取りに追われるうちにそれも全て自分に押し付けて逃げただけと思うようになった。

両親の借金によって佐藤は失った者が多い。

大学を退学せざるをえなかっただけでなく、借金取りを恐れ、当時付き合っていた彼女が去った。同様の理由で友達も寄りつかなくなってしまった。

だからすべての元凶である両親を憎んだ。そうでなければ、日々を過ごすことなどできなかったから。

「いい表情だ。そこら辺の不良ならそれだけで道をあけるよ。でも、こつちも商売だからね。どうにかして返してもらわないと。ほら、テレビとか漫画で私らみたいな商売の人がよく言うでしょ、借りたものは返さないって」

「だ、だからもう少しだけ……」

「そしてそう言うてくる人間にこう言うんだ……子供のお使いじゃねーんだよっ！」

起き上がり、顔を上げていた佐藤の顔に今度は相良の蹴りが当たる。

「おつとごめん。つい、テンションが上がっちゃった。でも、佐藤

くんはただ勝手に吹っ飛んだだけだよな？」

「……は、はい」

「うん、そうだよ。さて、君が取るべき道を提示しようか」

相良はそう言うと、倒れ込む佐藤の横にしゃがみ込む。

「ひとつは今すぐ耳を揃えて二億の借金を返済すること。出来るかな？」

「す、すみません。もう少し待ってください」

「ううん。待たない。だってもう充分待ったもん。だったら残りの選択肢はひとつだけだね」

「え？」

その時佐藤の脳裏に浮かんだのは、コンクリートに詰められて海に沈められた自分の姿。

体が震え、言葉すら紡ぐことが出来ない。

「死ぬ」

佐藤に対して相良の言葉が無慈悲に告げられた。

「……って言うのは、うちとしてはなんの意味もないのさ。だって貸した分が無駄になるだけで殺人なんてゆうリスクまで背負うことになる。でも、似たようなものかな……マグロ漁船って知ってる？」

相良の言葉に佐藤が頷く。

借金に追われた者に対して物語でよく語られる言葉である。

「って言っても天然のマグロを素人に釣ってこいなんてありえないよね。そんなところには行かせないから安心してよ。だったら何が言

いたいのかと思うよね？ 要は体売れってことだよ。ちなみにゲイ相手に売春しろってことでも、臓器を売れってことでもないよ？

「……つまり、俺をどうするって言っんですか？」

「人体実験に参加しろってことだよ」

佐藤に拒否権は存在すらしていなかった。

目隠しをされたまま車に乗せられ、道を走ること1時間ほど走ったところで車が停止する。

「降りろ」

先に車から降りた大熊という巨漢の男の声に従って佐藤が車から降りる。

「こっちだ」

逃亡防止のため後ろ手に手を縛られ、なおかつ首輪のようなものに取り付けられ、それに通された縄を大熊が握っているためどうすることもできない。

佐藤は声に導かれながら歩くしかない。

せめて、犬のように縄を引かれて動くのだけは避けたかった。

「佐藤、止まれ」

「よく来たね」

大熊の言葉に従い歩みを止めたところで聞いたこともない男の声が佐藤の耳に届く。

「これはこれは先生。自らお出迎えに来てくれたんですか？」

「丁度休憩中だったからね。それで今度はこの方が？」

「はい、そうです。それで……」

「ああ、金はいつものところに振り込んでおくよ。それじゃあそれを貰えるかな」

「大熊くん」

首輪に繋がる縄が大熊の手から見知らぬ男に渡される感触がして佐藤がわずかにだが身をよじる。

「それでは君達はここまででいいよ。また、よろしく」

「はい、それでは」

相良達が去っていく気配を感じ佐藤は小さく息を吐く。

「それじゃ、行こうか」

「あの……あなたは……」

「詳しいことは後ほどね」

そしてそのまま佐藤は男に誘導されるままに歩いた。

途中、エレベーターに乗り、下の階層へと降りた。乗っていた時間から計算するとかなり下であることは間違いない。

そしてエレベーターから降りたあと佐藤は部屋の一室へと通される。そこで目隠しを取られた佐藤が見たものは六畳ほどの無機質な部屋とその中央にある不釣り合いなほど大きなカプセル型の装置のよくなもの。そして眼鏡をかけ、白衣を着た身長170センチほどの

男だった。

佐藤は相良達が彼を先生と呼んでいたことから医療関係者と当たりを付け、相良の言った人体実験とは投薬のことだろうとも考えていた。

やはり、想像通りだったかとこれからの自分の身を危惧するが、ここまで来た以上どうすることもできない。いや、反抗する意思がないのだ。

（これで借金取りから解放されるのなら、薬の人体実験くらい……）

「さて、とりあえず裸になってくれたまえ。当然全裸だ」

「え、あの……」

佐藤は白衣の男の言葉に戸惑うしかできない。それもそのはず、いきなり服を脱げと言われて素直に従う者など稀有な存在だ。

「なんだい？」

「色々説明とかしてくれませんか？」

「ああ……それは後で。とりあえず服を脱いでくれ」

訝しがりながらも言われた通り佐藤は裸になる。

「ではそのままここに入ってくれ」

白衣の男はカプセル型の装置を開く。

佐藤は特に文句もなくカプセルの中に入りはしたが、自分がこれからどうなるのか説明が全くないことにひどく不安を感じていた。

「ではこれを頭に付けて寝てくれ」

そう言って佐藤が渡されたのは脳波を測る機械のようなもの。

「俺はこれを付けてどうすればいいんですか？」

「言っただろ？ 寝てくれってな。説明はそれからだ」

佐藤は言葉通りに機械を取り付け、カプセル内で横になる。

それと共にカプセルが閉じられてしまう。

「それじゃあ、始めようか」

白衣の男が機械を操作する。いくつかの電子音が流れるとカプセル内に液体が流れ込んでくる。

「お、おい！」

脱出しようともがき、カプセルを開けようとするがびくともしない。

「落ち着きなさい。ライフという人体に無害なものだ。水中でも息はできる」

（んなこと言われても）

水位はどんどん上がり、ついにはカプセル内がすべてライフで満杯になる。

佐藤は顔が水没する前に大きく息を吸い込み、耐えてはいたが、いつまでも息を止めていれるわけではなく、空気を口から吐いてしまう。

（し、死ぬ……）

「さあ、おやすみ。そしてようこそ、夢の世界、^{エデン}楽園へ」

男の言葉と共に佐藤は意識を失った。

仮想世界（前書き）

説明ゼリフ多めです

仮想世界

眠っていた意識が浮上し佐藤は目を開ける。彼はベッドに横たわっていたため、天井を仰ぎ見る形だ。しかし、佐藤の記憶のどこにも今見ている天井は存在せず、見知らぬ場所だという実感が湧く。

「どこだここは……」

佐藤は自分の置かれている現状を確認するべく辺りを見回す。佐藤が居る部屋はシングルベッドが置かれているだけの殺風景な部屋で他の家具類はない。しかしそれだけではなく、そもそも他の家具を置くスペースすらない。

「確か俺は得体の知れない眼鏡の人に促されてカプセルみたいな装置に入ったような……ん？ これはなんだ？」

そこで佐藤は自らの視界に不思議な物が映っていることに気づく。それは顔を動かしても常に視界の右上について回る。そこには《0BC》と表示されるが、佐藤に思い当たる節があるはずもない。

「いったい何なんだよ……」

『お目覚めかな』

考え込んでいた佐藤の頭に声が響く。

その声は佐藤にとってどこかで聞いたことのある、しかし懐かしくもなんともない声だ。

「……もしかして、あの眼鏡の人ですか？」

『ご明答。しかし眼鏡の人が……そういえば自己紹介すらしてなかったね。僕の名前は比嘉光博。研究者であり、開発者でもある』

「開発……ですか？」

『その通り。僕が作った作品は素晴らしいよ』

「はあ……あつ、そうか。その開発した物の実験台に俺を選んだってわけですね。それで開発した物ってなんなんですか？」

『ふふふ、君は不思議に思わないのかな……いったい僕はどうやって君と会話しているのかと』

その言葉に対する佐藤なりの答えはいくつか浮かびはしたのだが、どれも正解とは思えなかった。

「えっと、超小型の携帯電話とかですか？」

違うとはなんとなく感じつつも、耳の辺りを触りながら不審な物がないのか調べるがそれらしい物は見つかりはしなかった。

『違うね。少し難しかったかな。それでは答えを発表しよう。君がいる世界そのものが僕の……いや、僕らの開発した物だ』

佐藤は比嘉の言葉の意味を考えはしたが、全くもって理解することはできない。

『楽園^{エデン}、僕らは今君がいる世界をそう呼んでいる。そしてその世界は実は仮想世界なんだよ』

「仮想世界？」

『そう、完全なバーチャル世界。今現在の君のその姿は実体ではなく、カプセルに入る前に付けてもらった機械で脳波を測定し、具現化した仮想の電子体というわけだ』

「よくわかりません……」

『要は君の意識と身体を切り離して、意思に仮の身体を与え、そして行動できるようにした世界というわけだ』

比嘉の説明を佐藤は大まかに理解はしたのだが、それはにわかには信じがたいことであつた。

「そんな技術は聞いたことがありません」

『自分の価値観から外れる物は受け入れられないかね。それは恥ずべき行いだよ。すべてを知っている者などいはいはしない』

「いえ、あの、そういうことではなく……」

『だけどこれは事実だ。その証拠に君の視界の右上に何か見えないかい？』

「はい、これはいたい……」

『BCという文字はブレインキャッシュの略で、その世界における通貨のことだよ。そしてこれこそがこの世界において何よりも重要です。特に君にとってはね』

「どういう意味ですか？」

『ああ、これから大事な説明をしよう。まず初めに、君はこの世界から出ることはできない』

「えっ……」

比嘉の言葉に佐藤は言葉を失ってしまふ。

『はは、はやとちりしないでくれたまえ。何も一生というわけではない。ある条件を満たせば出ることは可能だ』

「条件……」

『そう、その条件とは10億BCを貯めてとある場所に持ってくることだ』

「とある場所ですか？」

『ああ、とは言ってもそう難しい場所じゃない。この世界の運営本

部でね、部屋から出ると外に繋がり、町に出るんだが、そこから見える一番高い塔のような建物が運営本部だ。そこに10億BCを持つてくれば君をゲームから解放しよう。そうすれば君が負っていた借金からも解放され、晴れて自由の身になるわけだ。さらに余剰分のBCに関しては十分の一を円に変換して渡ししよう』

「そう、ですか……」

『この世界の物価は大体現実世界と一緒にだ』

「それで10億を貯めると……いくらなんでも無茶過ぎる」

改めて比嘉の出した条件の厳しさに気づき、佐藤は非難の声をあげる。

『この世界は仮想世界だよ？ お金を貯めるのは現実世界より容易だ。何せこの世界はなんでも売ることができる。例えば素人が材料を買って作った料理なんかもね。そして運営本部に申請すれば無料で店も出せるし、税金もかからない。まあ、材料費や人件費なんかはかかるけどね』

「なるほど……それなら」

『まあ、現実とは違ってハイリスクハイリターンな戦人いくさびとと言う職種もあるけどね』

「戦人ですか……」

聞き慣れない単語に佐藤の顔が疑問符でいっぱいになる。

『そう、とは言っても馴染みがないだろう。戦人とは町の外に生息する異形の生物、通称アンノウンを倒しその遺骸から採取した部位を売って賃金を得る者達のことだよ』

「アンノウンですか？」

『ああ、強力なアンノウンは出現率は低いがその部位はどれも高価で、またその部位から造られる武器や防具は性能がいい』

「なんか竜を倒す某有名ゲームみたいですね」

『確かに似ている。だがしかし、テレビゲームとは明らかに違う。なぜなら戦うのは自分自身なのだからね。君は自分の身体能力以上のことは基本的にできない。まあ、武器や防具の重さはそれほど感じない仕様だから問題はないが、走る速さやジャンプ力は変わらないうというのは逃げる上では致命的かもね』

「そうなんですか」

仮想現実とはいえ、剣を持って戦うといった行為は男なら一度は憧れることだ。

10億稼ぐという一見無理とも言える難題を達成するために戦人になるのも悪くないと考え初めた佐藤の思惑は次の比嘉の言葉で脆く崩れ去ってしまう。

『ただ、気をつけて欲しいのはこの世界で君が死を迎えた場合、現実の君の肉体も死ぬということだ』

「なんだって……」

『聞こえなかったかな？ この仮想世界で死んだらゲームのようにコンティニューはなく、現実にも死んでしまうんだよ』

「……それが本当なのだとしたら戦人にはなれませんか」

『ふふふ……』

佐藤の発言に比嘉から笑い声が返ってくる。それはビビりとも取れる佐藤の発言を小ばかにしたのではなく、純粹に楽しかったから笑ったと取れるものだ。

「なにが可笑しいんですか？」

『いや、失敬。あのね、このゲームに参加しているのは君だけではなく無数にいるんだが、なんと実に参加者の九割以上が戦人になるんだ』

「な、なぜ……」

比嘉の言葉にまたしても佐藤の頭に疑問符が浮かぶ。

『それはね、仮想世界で君と同じ存在を殺すとボーナスが入るからだよ。殺した相手の所持金や装備品なんかがね。そして極めつけは殺した相手の身体能力の5%が自らの身体能力にプラスされるんだ』
「それがどうしたって言うんですか？」

『うん？ 人を殺したら自分の能力が上がり、なおかつ所持金も奪えるんだよ？ お得だよ。そして人を殺すために強くなる必要がある』
あり、殺されないために強くなる必要があるというわけさ』

その言葉を聞いて佐藤は戦慄を隠せなかった。仮想世界での死は現実での死に繋がると説明しておきながら、人を殺すように誘導するルールを比嘉は楽しそうに語る。

「なんだよそれ……なんで殺すために強くなんなきゃいけないんだよ」

『それだけボーナスが魅力的なんだよ』

「たった5%ぽっち身体能力が向上するだけだろ」

『おや、5%に対する評価が低いね。忘れたかな、日本の消費税はまさに5%だ。導入された当初は更に少ない3%だったにも関わらず、時の首相はかなり批判されたみたいだね。そしてその3%を恐れ、消費税が導入される前は人が店に溢れた。今だって選挙の時はよく聞くだろ？ 消費税撤廃って。人気取りのためにする気もないのに政治家がよく言うじゃないか。そしてまたこれが悲しいことに効果あつたりするんだよ。ほら、5%も馬鹿に出来ない』

「それはそうですけど、でもそのために人を殺すなんて間違ってる」
『おや、怒っているようだね。殺しを推奨するシステムは変えようがないよ。それが楽しみなんだからね』

「楽しみだと……」

比嘉の言葉に佐藤の手の握りが強まる。

爪が手の平に食い込み、佐藤に痛みを与える。この身体が現実の物ではないと信じていたかと思えて仕方がない。

『そうだよ。そのために君らのような人間を使ってるんだ』

「俺らのような？」

『君のような金に困った厄介者や死刑囚、そして酔狂な志願者など、いなくなっても問題ないような人間がこの世界にプレイヤーとして存在している。まあ、安心してくれ、人の住む都市は四つありいずれも一万を超えるノンプレイヤーキャラクター、いわゆるNPCがいるから数十人程度しかいないプレイヤーは滅多に見つからない』

「だからと言って……」

『見つけだして殺さないとも限らないかな。でも、NPCは独自の高性能AIで制御されているから見た目や行動ではプレイヤーは見分けがつかない。そこを見つけるのはプレイヤーの腕の見せ所だね』

「でも、無差別にキャラクターを殺していけばいずれはプレイヤーに当たる可能性もあります」

『そうだね。だからこそ、この仮想世界ではあらゆる犯罪が罰金制で行われる』

「罰金ですか？」

『犯罪を犯す可能性があるのはプレイヤーだけだからね。そのプレイヤーにとって致命的なのは所持金を減らされること。いくつか言くと、NPCの殺害で一人につき一千万BCの罰金、窃盗や無銭飲食は代金の倍額の支払い義務などだね。そのほかはやってみて確かめればいいよ。あ、そうそう大事なことを伝え忘れていたよ。このゲームには死ぬこと以外のゲームオーバーになる条件がある。それはこの世界で一年間で十億を稼げない場合と所持金がマイナス一千万になった場合だ。両方とも行き着く先は実体の死だから気をつけ

てね。あとの機能やら何やらは自分でプレイしながら覚えてくれ。そうだ、これらは最後に伝えなくちゃ。例え瀕死の重傷だとしてもこの部屋、つまりは自室のベッドで眠ると目を覚ました時には完治しているよ。あと、君の实体はどれ程の時間が過ぎようと問題はないから安心してくれ。カプセル内に満たされたライフが君に栄養や酸素を送っているし、排泄物の処理までしてくれているから問題はないよ。ではグッドラック』

そう言うとは嘉の音声が一方的に途絶える。その後佐藤が問い掛けても返信はなかった。

「とりあえず外に出てみよう」

そう言うて佐藤は腰を上げ、扉を開いて部屋の外に出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8478s/>

being

2011年10月8日04時59分発行